

令和6年度技術情報第26号（キクのクロゲハナアザミウマの殺虫効果試験）について

キクのクロゲハナアザミウマに対する主要農薬の殺虫効果試験について、下記のとおり取りまとめましたので、周知およびご指導をよろしくお願いいたします。

なお、本情報は病害虫防除所ホームページ（<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>）にも掲載しています。



令和6年度 技術情報第26号

キクではクロゲハナアザミウマが多くのは場で発生しています。本虫による被害は、品質低下（図1）を招くことから防除の徹底が必要です。

キクの主要農薬について殺虫効果試験を行いましたので、防除指導の参考にしてください。

- 1 対象作物 キク
- 2 対象病害虫 クロゲハナアザミウマ
- 3 供試虫 枕崎市の施設キクで採集した個体群（枕崎個体群）の累代飼育虫
- 4 殺虫効果試験の結果と注意事項

1) 試験結果

- (1) 2齢幼虫では、死亡率80%以上となった農薬は、トクチオン乳剤、スピノエース顆粒水和剤、ディアナSC、アフーム乳剤、アグリメックとグレーシア乳剤であった（表1）。
- (2) 成虫では、死亡率80%以上となった農薬はトクチオン乳剤、スピノエース顆粒水和剤、アフーム乳剤とグレーシア乳剤であった（表1）。なお、ディアナSC、アグリメックは幼虫より成虫で殺虫効果が劣った。

2) 注意事項

- (1) 供試した農薬はキクまたは花き類に登録（令和7年1月31日現在）があるものの、使用前には必ずラベル等を確認し、使用基準を遵守する。
- (2) は場の農薬散布状況によって殺虫効果は異なることが予想される。散布後は防除効果を確認する。
- (3) 本種は中下位葉の葉裏に主に寄生しているため、よく観察して早期発見に努め、発生が認められた場合は、薬液が中下位葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (4) 農薬の効果は、アザミウマの種により異なるので注意する。



図1 クロゲハナアザミウマのキク葉および花の被害

表1 各種農薬のクロゲハナアザミウマに対する殺虫効果（枕崎個体群）

供試農薬名	RAC コード	系統	希釈倍数	殺虫効果 ¹⁾	
				2 齢幼虫 ^{a)}	成虫 ^{b)}
トクチオン乳剤	1B	有機リン	1,000	◎	◎
アドマイヤー顆粒水和剤	4A	ネニコチノイド	2,000	×	×
モスピラン顆粒水溶剤	4A	ネニコチノイド	2,000	×	×
トランスフォームFL	4C	スルホキサミン	1,000	×	×
スピノエース顆粒水和剤	5	スピノシン	5,000	◎	◎
ディアナSC	5	スピノシン	2,500	◎	○
アフーム乳剤	6	ミルベマイシン	1,000	◎	◎
アグリメック	6	アベルメクチン	500	◎	△
グレーシア乳剤	30	イソキサゾリン	2,000	◎	◎
ファインセーブFL /アベンジャーFL	34	フロトキン	2,000	×	×

1) 殺虫効果：2 齢幼虫, 成虫は処理72時間後の補正死亡率を、×：0～30%未満, △：30～60%未満, ○：60～80%未満, ◎：80%以上で示す

2) 試験方法

供試虫: 令和6年10月31日, 11月1日に枕崎市の施設キクほ場から採集し, キク苗で累代飼育した個体。

検定日: a) 令和7年1月21～24日, b) 同年1月21～24日, 28～31日

検定法: 所定倍数で希釈した薬液にキク葉を30秒間浸漬して風乾した。その後, 処理葉をマンジャーセルに置き, 幼虫を9～11頭, 成虫を9～14頭放飼し, 3反復で検定した。マンジャーセルはプラスチック容器に入れ, 25℃設定の室内に静置した。

展着剤: ベタリンA (5,000倍) を加用

補正死亡率: 3反復の死亡率の平均値を用いて, $\{ (処理区死亡率 - 無処理死亡率) / (100 - 無処理死亡率) \} \times 100$ で算出